



題字…今山政三郎氏

発行所  
新潟県小学校長会広報部  
新潟市中央区幸西3-3-1  
じょいあす新潟会館2階  
TEL 025-290-2231  
FAX 025-245-6060  
E-mail: nksjko@niigata-inet.or.jp  
印刷所 株式会社 文久堂  
カット…石塚 崇  
(新潟 坂井東小)

令和元年度  
第一回 県小評議員会 (報告)

日時 六月二十日(木) 十四時~十六時十五分  
会場 上越市「高陽荘」



# 「私どもには学校教育があつた」

新潟県小学校長会 副会長 熊倉達也

文部科学省・浅田和伸氏の講演の冒頭、内村鑑三の『代表的日本人』(岩波文庫)の一節が紹介されました。

「そう。私どもには学校教育があつた。(略)学校もあり教師もいたが、それは諸君の大いなる西洋にみられ、今日わが国でも模倣しているような、学校教育とはまったくちがったものである。まず第一に、私どもは、学校を知的修練の売り場とは決して考えなかつた。修練を積みれば生活費が稼げるようになるとの目的で、学校に行かされたのではなく、真の人間になるためだった。」

一九〇八年、外国人に対して書かれた英文著作の翻訳です。日本人が大切にしてきた道徳性や学校本来の機能、教師(先生)先に真理を了解した者)に対する尊敬など、伝統的な教育の価値を改めて知り、安堵しました。

一方、学習指導要領のポイントである資質・能力は、OECD・DeSeCoの「キー・コンピテンシー」がベースになっています。そこでは、知識基盤社会において、技術革新や創造をもたらすことのできる人的資本(Human Capital)への投資が、経済成長や社会の安定には必須であるとされています。「教育は社会の動きを読むことが必要であることは言うまでもないが、不易を押さえないと危ない」とする浅田氏の話には緊張感が漂っていました。私たちの学校教育は、人的資源の開発のみに矮小化することなく、資質・能力(コンピテンシー)の育成という社会の要請に応える中で、人格の完成を目指すものでなければなりません。学校は何のためにあるのか、今までのやり方はその目的に合致しているのか、常に問い直しながら実践を積み上げていかねばと思いを新たにしています。

(長岡・三島 阪之上小学校)

## 一 開会の挨拶

山形県沖地震では、村上・山北まで休校が続いている学校がある。一日も早い復旧・平穏を願っている。開プロ千葉大会で記念講演の千葉工業大学古田氏の話に示唆があつた。「ロボットを作る脳と文章を作る脳は同じで、起承転結のある文章が書けることが大事。小学校はワクワクや感動の連続であってほしい。尖った個性を大切にすることが大事」ということ。これからの教育について考えていくきっかけにしたい。

## 二 議長選出

糸魚川地区評議員

## 三 報告

・会務報告・全連小・開プロ関係

## 四 協議

(一) 各都府の事業計画について

(2) 対策部  
調査活動で「市町村における教育関連予算」に関わり、ネット環境について調査を行う。校長と市への調査が重複しないようにする。

(3) 福利部  
校長の給与等の実態について調査研究し、給与水準の維持向上のための要望活動に生かす。また、退職後の再就職状況等を調査し、雇用促進の要望活動に生かす。

(4) 研修部  
学習指導要領への対応を喫緊の課題ととらえ、地域の信頼を得る創造的な学校経営を展開するために、校長研修会を開催して研修を深める。

※地区別研修会  
上越 九月十三日 柏崎・刈羽大会  
中越 十月八日 三条大会  
下越 十月四日 佐渡大会

(5) 広報部  
会員の連携と学校経営の改善充実に資するよう、活動や当面の課題に関する情報を提供する。

(6) 令和元年度全連小秋田大会、令和二年開プロ茨城大会

## 五 連絡

(一) 日本教育会新潟県支部総会・研修会  
七月六日(土) 高陽荘

(二) 次年度代議員会 令和二年五月十三日(水) 長岡リリックホール他

## 六 閉会の挨拶

久里浜医療センター樋口院長の講演「ネット依存から子どもを守る」を聴き、今何が大切か何ができるかを考えた。看過できない状況にある。

熊倉副会長



特別寄稿

# 「米百俵の精神」と

## これからの長岡の教育

長岡市教育委員会 教育長

金澤 俊道



昨年長岡市は開府四〇〇年、戊辰一五〇年という歴史的節目を迎えた。様々な記念イベントや企画展が行われる中、改めて長岡の歴史を振り返り、これからの長岡の未来を考える良い機会となった。これまでの長岡の教育と今後について話題提供したい。

### 一 米百俵の精神

戊辰戦争で焼け野原になり、食べるものがない長岡に、支藩である三根山藩から見舞いとして米百俵が贈られてきた。当時、藩の大参事であった小林虎三郎は教育第一主義を唱え、藩士を説得してこの百俵の米を売却し教育にあてた。これが米百俵の故事である。

ここで深掘りしたいのは、百俵の米のおかげで学校ができたのではなく、支援米の百俵の米すらも人材育成の資金にあてたということである。つまり、米百俵の精神とは、百俵の米の資金によって整備されたところにとどまらない、長岡の根底に流れる精神文化なのである。長岡市ではすべての子どもたちにこの精神を伝え、未来を切り開いていける人材となるよう願っている。

### 二 近年(平成)の長岡の教育 「人材教育」

近年の長岡の特色ある教育は、平成七年度から本格実施された「人材教育」に始まる。平成三年度の中教審答申で文部省が「卓越性」(卓越性)を取り上げ、新しい時代に対応する教育の方針を示した。これを受け「人材教育」では、大きな目的の一つとして卓越性を掲げた。そこで、子どもの卓越性を伸ばし社会性を養うには自校完結の考え方から、複数校の子どもたちを集め複数校の教員の力を結集し、さらには市民(名伯楽)を導入するという考え方に転換する必要があると考えた。

具体的には、子どもの才能を体育・芸術・言語の三系列に特化し、学校をいくつかの群に分け、群内の学区・学年の枠を取り払い、原則として五年生以



上の小学生と中学生を対象に、子どもが希望する系列の場所で特別指導を受けられるようにした。

「人材教育」は、卓越性の進展を図る教育を公教育に取り入れた教育施策として全国から注目された。

### 「熱中！感動！夢づくり教育」

人材教育が始まり一〇年が経過した平成一七年度、人材教育一〇年を振り返り、課題と成果を整理し、現在の長岡の教育の根幹をなす「熱中！感動！夢づくり教育」がスタートした。目標を「豊かな体験と確かな学びで、夢を描き、志を立てる力と生き抜く自信を育む」として、今年度は七十一の事業に四億六千万円の予算をかけ、学校の自主性を尊重した教育活動を進めている。

特色ある事業としては、「学校・子どもかがやき塾」事業として、学校と校長に裁量予算を配当している。これにより各校で特色ある取組が行われ、多くの教育実践が、全国規模の教育賞を受賞している。「教員サポート錬成塾」事業では、若手教員に対し退職校長が一年間マンツーマンで指導をしている。全国でいち早く始まったこの取組では、実施からのべ千二百人の塾生を輩出している。さらに、子どもたちが本物に触れ、感動体験をするため、四十九の事業を準備し、各校が各校の実態に合わせて有効に活用することで、豊かな体験活動が行われている。本事業の一〇年目の節目に事業評価を行った。その際の児童生徒意識調査では、「学校に行くのが楽しい」「授業で『分

かる』『できる』と感じる」「住んでいい地域が好き」「長岡市が好き」などの項目で、開始当初の数値を上回った。

### 三 これからの長岡の教育

山積する教育課題、Society5.0、社会は大きな変化を迎えている。その社会を生きる子どもたちを育ていく教育にも変化が求められている。長岡の教育も新たなステージに向かって準備をしている。その一端を紹介する。

### 現在「熱中！感動！夢づくり教育」

の大幅な見直しを行っている。方向性としては、学校教育と社会教育の融合により、子どもたちの個性と可能性を最大限伸ばすことである。学校の負担を増やさずに、米百俵のまちならではの人材育成に尽力している団体・個人の力を活用していく。そして柱となる学校教育をより充実させ、そこで培われた、能力や意欲を、個々の興味・関心や得意分野等に応じ継続的に学ぶ場を提供し、オール長岡でさらに子どもたちの可能性を伸ばしていきたい。米百俵の精神を背景に、「人材教育」の視点も取り込んだ新たな教育施策である。今後広く意見を聞き、十分に検討しながら形にしていきたいと考えている。

### 四 最後に

先の見通せない激変の今こそ、不易と流行をしつかりと見極め、連続と受け継がれてきた日本の教育の良さを見失うことなく、しかし、流行には敏感に、現場、関係機関とコミュニケーションを取りながら長岡の教育行政を進めていきたい。



# 糸魚川の宝石「国石翡翠」の数奇な運命

伊野昌子

## 一 「翡翠」を国石に選定

二〇一六年九月、翡翠で知られる糸魚川市にとって極めて喜ばしい出来事があった。それは日本鉱物科学会が、国石として「翡翠」を選んだことである。学会が国石の条件としたのは ① 知名度 ② 学術的重要性 ③ 日本人との関わり ④ 継続性 ⑤ 持続性 である。「翡翠」はこれらの条件を満たし国石に選定された。

## 二 翡翠は生命力の象徴

「翡翠」は約五千年前の縄文時代中期から古墳時代にかけて、日本各地の遺跡から出土している。この頃は「翡翠」ではなく「玉」と呼ばれ「大珠」や「勾玉」などの宝飾品に加工され、耳飾り、首飾りなどに使われた。古代の人は緑色翡翠を好んで使った。緑は生命を象徴する色である。翡翠はとても硬いので、研磨や穴開けは困難を極めたと考えられる。



翡翠大珠

提供：糸魚川市教育委員会

翡翠は『万葉集』にも登場する。

「沼名川（ぬながわ）の底なる玉 求めて得し玉かも拾いて得し玉かも あたらしき君が老ゆらく惜しも」（巻十三：三二四七）（沼名川の底にあったこの玉は、探し求めて得た玉なのだ。拾い求めて得た玉なのだ。そのようにすればらしい君が、老いゆくのが惜しい。）

沼名川は現在の姫川と考えられている。翡翠の大珠は、集落で特別な力をもった人物、例えば古事記に登場する奴奈川姫のような支配者や祭祀者が身に付けていた。

ところが翡翠は、東大寺法華堂の国宝不空羂索観音立像（七四〇年頃の制作）の宝冠の勾玉に使われたのを最後に日本の歴史から姿を消してしまう。一九三五年に糸魚川市の小滝川で翡翠が発見されるまで千二百年の間、宝石として利用されることはなく、歴史の舞台から消失してしまうのである。

## 三 小滝川で翡翠再発見

翡翠は近年になるまで産地も加工場所も特定できなかった。ビルマや中国チベットから渡来したとする説が有力であった。糸魚川市では一九三五年を翡翠再発見の年としており、それは昭和十年に当たる。日中戦争から太平洋戦争へと国内は軍事色に染まっていく

特別な時期であった。

この翡翠再発見に大きく関わった人物がいる。発見者は糸魚川市小滝地区在住の伊藤栄蔵であり、発見の動機となった人物は、糸魚川が誇る文人、相馬御風である。翡翠再発見のいきさつは次のようなものだ。

昭和十年初夏、伊藤は親戚の鎌上竹雄から、相馬御風が翡翠の話をしていただくことを聞く。その内容は、奴奈川姫の首飾りが翡翠の勾玉であったこと、残されていること、小滝川か青海川で翡翠を探せば見つかるのではないかと聞いていたという話であった。そのことを聞いて、伊藤は小滝川の水位が下がる八月を待ち、翡翠を探し始める。そして、その翌日には翡翠らしき石を発見する。小さいハンマーで叩いてもなかなか割れず、大きなハンマーに持ち替えて、ようやく一キロ大の石を二つ採取した。早速、御風にその石を届けると、「これは翡翠に間違いない」と言ったというのである。その後、石の鑑定を依頼された東北大学の河野義礼が、小滝川に調査に訪れるなどして、徐々に糸魚川が良質な翡翠の産地であることが明らかになっていく。

## 四 沈黙された翡翠再発見

翡翠の産地は糸魚川であった。このニュースはまたたく間に広がりそのようなものである。しかし御風ら関係者はこの事実について長期間沈黙する。日本が戦時色に染まっていくなか、翡翠が国威発揚に利用されることを恐れたの

ではないかと言われている。また、戦後日本はGHQ占領下に置かれた。占領軍によって翡翠が採掘されることを危惧しての沈黙であったと考えられる。結局、御風は没するまで翡翠発見の事実を親しい人にも明かすことはなかった。糸魚川での翡翠産出が世に知られるようになったのは一九五四年、小滝川の翡翠が天然記念物に指定された頃からである。

## 五 国石翡翠の危機

現在、翡翠の原石は小滝川と青海川で国指定の天然記念物として保護されている。しかし指定地域においても破壊盗掘があり、いつの間にか消失するなどの被害が発生している。国石翡翠が危機に瀕していることを多くの人に知ってもらい、国石として保全への協力を呼びかける必要があると考える。



セリ矢が刺さった翡翠

提供：フォッサマグナミュージアム

### 参考文献

『国石翡翠』宮島 宏 フォッサマグナミュージアム 二〇一八

『日本古典文学全集 万葉集3』小学館 (糸魚川市立下早川小学校)

郡市だより

「気付き、考え、

実行する校長会」

を目指して

柏崎市刈羽郡小学校長会

柏崎市・刈羽郡は、四十二kmに及ぶ海岸線を持ち、海に沈む夕日が大変美しい、豊かな自然と文化に恵まれた地域である。校長会は、柏崎市二十名、刈羽郡一名の計二十一名の会員で構成されており、会員の英知と組織の総力を結集しながら、「気付き、考え、実行する校長会」を目指し、活動に取り組んでいる。

今年度は、「特色ある学校づくりの推進」「社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善」「経営者としての指導力、経営力の向上」「地域や学校の実態に応じた教育諸条件の整備」「学校における働き方改革への意識改革と環境整備」等の実現を目指している。そのために、対策部・福利部・研修部・広報部・財政部の五つの専門部会を設け、積極的な取組を展開している。

今年度は、「特色ある学校づくりの推進」「社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善」「経営者としての指導力、経営力の向上」「地域や学校の実態に応じた教育諸条件の整備」「学校における働き方改革への意識改革と環境整備」等の実現を目指している。そのために、対策部・福利部・研修部・広報部・財政部の五つの専門部会を設け、積極的な取組を展開している。

二 活動の推進

(一) 研修への取組

年十一回の定例校長会を実施している。会場は学校持ち回りとして、会場の教育活動を紹介している。また、当面の諸課題についての協議や情報交換、教育課題解決に向けた研修も行う

ている。これまでに、教育長からの指導と特別支援教育に関する研修を行い知見を深めてきた。毎年、自然・歴史・文化等の地域巡検も行っている。五月には、吉井行塚古墳群の見学を行い、柏崎の歴史への理解を深めた。

今年度、上越地区研究会柏崎・刈羽大会を主管する。現在、開催に向けた準備と運営を、全会員が役割分担をし、計画的に進めているところである。

(二) 中学校長会との連携

小中学校教育の発展充実を図ることを目的とした、小中学校長会連絡協議会がある。そこでは、教育委員会と共催の教育懇談会、そして小中合同研修会を開催し、研修を深めている。また、「市長と校長会との懇談会」を設けている。懇談会では、教育現場の声を広く伝え、市長と意見交換をし、柏崎の教育についてともに熱く語っている。教育現場の声を市長に直接届けるまたない機会になっている。

今後も、これらの取組を継続し、柏崎市・刈羽郡の小中学校教育の充実・発展に寄与していきたい。

(鯨波小学校 石坂聡子)



学校紹介

地域の子どもを地域のみんなで

育てる教育活動の推進

村上市立保内小学校

村上市立保内小学校は、村上市の南の玄関口となる、荒川地区の中心地に位置し、全校児童三二五人、十六学級の学校である。創立明治八年、本年度で一四四年となる。教育目標「強い力、豊かな心」の実現のため、「一人一人が輝く学校、笑顔あふれる学校」を目指す学校像、「学校が楽しいと目を輝かせて登校する児童」を目指す子どもの姿として、地域・保護者とともに調和のとれた教育活動を進めている。

一 あいさつ・がまん・あとしまつ

村上市では「地域の子どもを地域のみんなで育む」ことを目指し、「郷育(さといく)」を進めてきた。また、荒川中学校、金屋小学校、保内小学校の三校による荒川地区では、市町村合併で村上市となる以前から、「あいさつ・がまん・あとしまつ」ができる子どもの育成に取り組んできた。

そして、今年度から新たに、コミュニケーション・スクールが導入され、学校運営協議会が設置された。これまでの歩みを生かし、この荒川地区で大切にしてきた「あいさつ・がまん・あとしまつ」を地域・保護者そして学校の共通の理念として推し進めている。

九月の最終金曜日に荒川地区の小中学校、高校、保育園、地域全ての人々で行っている「あらかわあいさつの日」がその取組の一つである。

二 地域と連携・協働した教育活動  
保内小学校は、平成二十八年度から昨年度までの三年間、新潟県・新潟市教育研究会指定の生活科と総合的な学習の研究に取り組んできた。

研究では「社会に開かれた教育課程」の具現化を図るために、地域と協働・連携する中で、地域の活動や人々の思い・願いに触れることを大切にしてきた。このような学習の目標を達成するために、「地域教育推進委員会」を設置し、地域にある自然や文化、社会的な活動などの調査を進めてきた。職員が現地に足を運び、実際に触れ、実際の様子を見たり直接人と関わったりして教材を開発してきた。

このように、学校と地域とが一体となった教育活動に全力を挙げて取り組んでいる。

(須貝 学)



あらかわあいさつの日

県小学校長会  
HPへアクセス



学校経営に役立つ  
情報満載